



中里恒子全集

中里恒子全集 第十四卷

定価二〇〇〇円

昭和五十五年一月十五日印刷
昭和五十五年一月二十五日発行

著 者 中里恒子

発行者 高梨 茂

印刷者 青木 勇

発行所 中央公論社

東京都中央区京橋二ノ八ノ七

電話(五六一)五九二一

振替東京二一三四

検印廃止

©一九八〇

目次

葦手書

柳眉

貝母の花

うつつ川

誰袖草

置き文

あとがき

解題

3

57

107

163

225

335

439

441

葦
手
書

会場にはいると、客席はばらばらと散いたような埋り方である。素人のお浚い會では、知りあいの者の出演が済むと、帰ってしまう客が多いためであった。

時間をはかって来たつもり、望月夫妻の番は、このあと二番の次で、佐久は、故意に避けたように空いている、中央の舞台に近い端の席にかけた。

赫ら顔の男の老松を聴く。声がよく、たっぷりしていた。総じて唄の者は体格がよく、絃の者は、ひょろっと痩せ気味の者が多い。歌えば、腹に力がいって、胸も張り気味になるので、次第次第に太り気味に、丈夫になるのか、丈夫な体質だから、声量があるのか、どちらが原因か、結果かわからない。

佐久は、久しぶりで老松を聴いた。若い頃、習っていたときは、単調で覚えにくく、むずかしくて馴染めない曲であったが、うつむいて聴いていると、いかにも長唄らしい、のんびりした曲で、これは子供が歌っておもしろいものではなく、大人の唄だという気がした。

眼鏡をかけかえ、プログラムを見る。次が、秋色種^{あきのいづさ}で、その次が、望月夫妻の吉原雀である。望月夫妻は、主人が唄で、細君が三味線という仲のよさで通っている。上手下手は別にして、

内内の手合わせは我がままが出て、却ってやりにくいときいているが、望月の細君は、さっぱりした無邪気な質にみえる。

「私が弾くなら、御祝儀が要らないでしょう、ですから、並ばせられているんですよ、」

「いつでも、お合わせになれるから、」

「いえいえ、唄をきかせるのだから、三味線は、ばちばち弾くとか、かけ声がどうだのと、自分ばかり、引き立たせたいのですから……」

正直な話をする。素人同士では、どうしても自分の唄なり、絃なりを主張しがちであるが、片方が玄人の場合には、歌いどころと、弾きどころのかね合いを心得ていて、唄も充分かばい、絃も引きたたせる術が出来ている。望月夫妻は、どちらかと言えば、主人の唄の方が年期も長く、うわ手であった。

吉原雀のはじまる直前に、ずっと、佐久の席の前にかけた、年輩の男女ふたり連れがある。地味な作りだが、女の方は垢ぬけた恰好で、色白の太り肉の、おとなしい感じで、男は、背広姿はあるが、ただのサラリーマンではなさそうな、と言って、ふたりが夫婦という感じでもない。いづれにしても、出演者と義理のつきあいがあって、ちょっと顔を出さなければならぬ間柄の客が、藝ごとの催しには多いので、佐久も、特別の関心をもったわけではない。

幕が開くと、望月夫妻が紋付で並んでいた。主人は茶の無地に、紺の袴、細君は、うす茶地のぼかしで、三味線を持った袂の下と、裾前が淡くぼかしてあり、夫婦で、色の統一をはかったようであった。

「綺麗なおくさん、」

「……おはじめになって十年足らずだそうですな、もっとも、お若いとき、ピアノをなさったそうで、譜をよめるとか、それが、却って困るって仰言るんですよ、旦那の声の間よりも、譜の方が頼りで、」

ふたりは、うしろの佐久にもききとれるほど、遠慮のない、ひそひそ話である。主人は獨吟だが、細君の脇には師匠がついて、絃の強弱に氣を配っている。しかし、佐久は、細君がよく弾いているのに感心した。

痩せ気味な体で、薄い膝に、三味線が安定して、棹のもち方も品よく、袂の先のぼかしが、くつきりと舞台に映えた。佐久は、もう稽古をしていないが、体が太ってくると、膝も厚くなって、三味線がすべり気味になるのを知っていた。名人上手と言われる三味線弾きは、いづれを問わず、痩せ気味で、すこし猫脊で、しっかり三味線を抱えこんで、形よく安定しているのである。

望月夫妻の番が終ると、前のふたりは、すぐ立ってしまった。佐久は、その時、男の顔をみたが、どこかで見たようなと思った。

佐久は、廊下へ出て、なんとなくその辺のひとの出入りを眺めていた。望月夫妻のつきあいも多いので、樂屋が静かになってからにしようという頃合いを見ているのであった。

そこへ、不意に、望月夫妻が現われて、知人たちに挨拶している。佐久は、そばへ寄っていった。

前の席にいた男が、望月の細君と話している。佐久は、その時気づいた。それは、茶道具商の、

古い番頭であった。店をもつよりも、まだまだ気らくだと言って、獨立はしないが、店うちで、自分の商売をさせて貰う、つまり、その番頭自身の顧客をもった存在なのである。

「しばらくで、ようお出かけになりました、」

佐久にも、如才なく声をかけると、

「じゃあ、わたくしはこれで失礼いたします、こちら様のを伺えば……結構でございました、」
さっと、帰っていった。佐久は、望月夫妻と暫く立話をして、楽屋見舞をわたすと、細君が、すこし小声になって、

「番頭さん、おひとりでしたかしら、子供だましのようなものですけれど、お連れの方がおありかどうか伺わずに、一つだけおもたせしましたので、」

佐久は、おやつと思った。舞台の上から、このひとは、番頭と並んだ女のひとに気づいていたのであろうか。

「さあ、気がつきませんでした、」

すらっと、佐久は答えた。あの女のひとと、番頭と、望月夫妻と、どういうつながりがあるか判然としない佐久にも、細君に、ありのままを言っではまずいような、世の中、とかく、ばか正直で失敗したと気づいている佐久にとって、気がつかなかった位の返事が、妥当に思えたのである。

細君は、すぐ話を変えた。

「會に出るのは、もう私はかんべんして頂くつもりですわ、やっぱり玄人さんについて頂く方が、

主人もらくでしようし、私も、出しゃばりじみないですみますでしよう、」

「お揃いでお稽古なんて、誰にも出来ることではございません、」

「いいえ、それは表向きのことですわ、」

「……」

佐久は、それ以上立ち入ることを恐れて、その場を辞した。

一見おとなしそうに見えるが、望月の細君は、非常な利巧もので、子供のないことを望月が苦にして、養子を貰うと言い出した。その相談を、佐久の良人にしたことがある。その話を、佐久から聞いた細君は、

「養子なんて、いざこざのもとになりますからね、なにかあれば……ですから、望月が、他處で、もしも子供でも産ませているなら、喜んで籍に入れると言っておりますのに、」

うらめしそうに、佐久に言った。

佐久は、良人に、その通りに傳えた。すると良人は、

「どうか、そんなにさばけているだろうか、なにしろ、稀代のやきもちやきときいているよ、」
「すぐに、あなた方は、細君をやきもちと仰言るけれど、やきもちを焼かないようなのは、おもしろくないなんて、全く、御自分に都合のよいことばかり、」

「いや、本当だよ、なにしろ、望月のところには、細君から、三十分おきに電話がかかるそうだ、所在をたしかめるために、」

「あら、ほんと、三十分おき、」

佐久は、好奇心いっぱいいの声を出した。佐久の家では、息子は轉任で九州住い、娘は結婚して、家は夫婦ふたり暮しになっているが、子供のことと、家のつきあいに追われて、望月の細君のように、良人を疑うような真似は、露ほどもしたことがない。

道楽と言えば、骨董いじりで、道具屋まわり位よりほか、能はないものと思っている。その為、道具に使うお金で、着物が何枚出来るであらうと、それを勘定したこともあったが、もはや、それも諦めきって、さっぱりと、良人の道楽に従っていた。そのせいもあって、少しは、道具に興味をもち出した。

「……うそにしても、三十分おきに電話では、望月さん、どうなさるの、身動き出来ないじゃありませんか、」

「いや、それは周囲で承知していて、なんとも恰好をつけるよ、凄いい御執念ですな、そんなに大事にされて、羨しいです、なんて、秘書まで言うくらいで、望月は、苦笑しながらも、満更ではないらしい、その上で、適当にやりたいこともしているよ、」

「そうですか、どんなに忙しくても、それとこれは、別なのね、」

佐久は、ふっと、良人の道具屋通いも、案外……あてにならないかも知れぬ、と思いはじめた。

「春の軸を探せという仰せで、二本お持ちいたしました、正月は、いつも、一行ものの書をお掛けになってらっしゃいましたな、」

番頭は、そう言いながら、

「なんか春らしい絵と仰言るので、松花堂の鶏と、抱一のものでございます、」

佐久は、番頭が包みをほどこかないので、どうしたものかと思ひながら、茶の仕度をした。やっぱり、見て受け取っておかないと、萬一、まちがいのあった時困る、と思った。一服したあとでときめて、何気なく言い出した。

「先達ての、望月さんの會のとき、あなた、お連れさんがあったでしょう、」

「ええと……はい、望月さんも、すっかり本ものにおなりでございます、」

「たしか、女のひとと御一緒でしたね、垢ぬけた方だったわ、」

佐久は、たたみかけて言った。

「私がですか……いいえ、ひとりで、望月さんの所だけ伺いに出ましたので、」

「そう、そんなことおたずねしてごめんなさい、」

「いいいえ、よくお供をいたしますが、先達ては、ひとりで参りました、」

「……」

佐久は、番頭の、髪の毛ひとすじほどもゆるがぬ顔に、却って赤面して黙った。

「お眼にかけましょう、お氣に入るかどうか、どうぞよろしくお口添えを、」

番頭はすっと立って、軸を手早くほどくと、持参した自在式の吊手つりてを、長押ながしにかけて、そこへ軸をかける。佐久は、松花堂と抱一にまちがいのないことを確めた。

「いいわね、」

「……近頃すくないのでございます、手頃のものは、」

番頭は、そう言いながらするすると巻いて、元のように包むと、早急に挨拶して帰っていった。

あの時、佐久の前に腰を下していて、立った時、佐久の顔に気づいたに違いないのに、その時は眼ばたきもせず、連れの女のひとを送り出してしまってから、何食わぬ顔で、望月夫妻に會っている。

名うての骨董店の、信用ある番頭ともなれば、御鼻屑から頼まれたことは、口が裂けても口外しない。だから信頼もされて、内輪の極秘状況にも一役買うこともある。そうなれば、たとえ、白を黒と言いつ張つても、頼まれたことは、どこまでもしらを切つて通すのが身上で、旦那の味方につくか、奥さまの味方につくか、荷担は一つなのである。

両方によく思われようなどと、あらぬ忠義だてをするのは、結局、虻蜂とらずになって、あれは、お喋りだからと、もう大事なことは参画出来なくなる。従つて、商売の方も、思わしくなくなるのは、やむを得ないこと——憎まれ役もひき受けなくてはならぬ辛い立場もあった。

佐久は、なんとなく、番頭の連れの女のひとが、望月に、関わりがあるような気がした。だから、番頭を探つてみたのだが、案の定、知りませぬ、存じませぬで、悠悠と帰つたのは、やはり、存じておりますということではないかと、番頭の裏側を見る思いがする。

しかし佐久も、ばか正直ではこりごりしているので、番頭の態度は流石だと思つてゐる。嘘をついても、嘘をつき切つてしまふ圖太さの底には、いざとなれば、自分が灰をかぶる覚悟が出来

でいるからなのだ。

佐久のばか正直は、直情と言うか、愚鈍というか、正直ものと思われたい心が先立ってのためで、なんでも本当のことを言えばよいと言う、子供じみた、人間的には、むしろ相手を傷つけることがあった。

「折角、いい庭だ、うまい料理だと、相手が喜んで言っているのに、いいえ、駄目になりました、以前の趣きはありませんと、ま正直に言われては、相手が、まるで、わからずやのようにきこえるではないか、たしかに、まづくなったよ……けれど、相手を喜ばすために招んだのに、なにも、あんたが、本音を言うことはないんだ、」

良人から、この類いのことでは、何度かたしなめられた。佐久は佐久で、ほかにとりえのない、かけひきの言えない単純な性質で、ものごとを正直に言う以外の、ひとの顔色をみることを知らぬ。それが、そうではない、嘘の方が、本当よりも本当にとれる、ということが、ようように解って来た。その第一の見本は、道具屋のまじめな、とぼけ方である。

佐久が、夏の終りに、胃腸をこわした予後の養生に、箱根の湯本の宿に滞在したことがある。

風呂から出て、庭を散歩していると、車が着いて、男ふたり、女ひとりの客が、案内されていた。二階の、一番見晴らしのいい部屋にはいった様子、佐久の部屋は、ひとりと言うこともあって、二階の突き当りの、梯子段に近い場所である。窓から、内庭がみえて、景色はよくないが、人影がちらちら見えるので、養生の身にも、淋しさはなく、家庭的な感じの場所であった。

しかし、三日も泊ると、景色も鼻について、窓からぼかんと、湯上りの体をもてあましている。

十一時を廻っていたらうか、ひとりの男が風呂敷包みを下げ、ひとりの男は、キャンパスらしいものを肩にかけ、絵具箱らしいものを女がもち、キャンパスの上に毛布を肩にかけた男と、連れ立って出ていった。

「絵かきさんだろうか、」

佐久は、乗り出して、そっと、一行の様子を眺めた。庭から、裏山の方へ行くらしく、一行の顔が、佐久の正面を向いた。

「あら……」

佐久は、眼をこすった。キャンパスを持った、毛布を肩にした男は、どうも、某家の茶會のとき、一切の手配をした、その家の古い出入りの道具屋に似ている。某家は、この山に別荘もあり、そこへ伺うついでと言っても、絵かきさんのようなスタイルで、道具屋がこんなところに来る筈はないのだ。それとも、絵を描く趣味があったのだろうか。

翌日も、佐久が、湯殿からの戻り道で、きのうの三人が、きのうのような形で出ていったのを見た。キャンパスを持って、主人顔をして、女のひとと連れ立ってゆくのは、まさしく稲葉屋である。

先方は、気づかずに、行ってしまった。そして三日めの朝には、車に乗って帰っていった。佐久は、週末に良人が迎えに来たとき、顔をみるやいなや、この妙な一行の話を、夢中で話し出した。

「あの稲葉屋さん、絵など、描くのですか、風呂敷包みを持った男のひとの方が、よっぽど、い